多様で持続可能な対人援助に必要な「知」について２

本間たけし（退院支援研究会　新潟）

ガリレイは、自然を数学的に理念化すると同時に
「生活世界」の隠蔽者となった
～E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』～

【第２章　広島で学ぶ「対人援助の多様性と持続可能性」】

１０　G.バタイユ著　酒井健訳:『ヒロシマの人々の物語』

我々は、1945 年 8 月 6 日朝 8 時 15 分の少し前、「自分は何かの病気にかかったのではないか」という不安に駆られていた広島のひとりの人間に似ている。彼はその直後に死んだが、何が自分を待ち受けているのか知ることはなかった。しかし「賢者の啓蒙的な英知」が、「民衆の盲目的な知性」より常に正しいとは限らない。それらがパニックに陥る傾向（理性的な言説の領域）と、無関心の傾向（感性の領域では無関心は現実の問題だが、行為を決断する領域ではほぼ全面的な死を意味する）からなる流れは、約 10 年前（1937 年にスペイン内乱、二・二六事件、日中戦争などが起きた）と同じである。パニックの中では、原爆投下が繰り返されれば予想される結末が大げさ（地球の消滅など）に語られてしまう。精神の日常的な尺度と原爆がもたらすものとがあまりにかけ離れているため、人は空虚の前で想像力を空回りさせるばかりだろう。

爆心地からの隔たりは地理上の問題ではなく、日本とフランスの人々の精神的コミュニケーションの問題でもある。ヒロシマとナガサキの原爆は、感性より思考に多くを提供する。もしも事前に爆撃や退去の勧告も出されないまま、原爆がフランスのボルドーや、ドイツのブレーメンに投下されていたら、我々は原爆投下をけして「なかば科学的な実験」という意味合いでは捉えないだろう。この実験は想像力を動転させるほどの規模で、その悲劇的効果は確実であり、感性的な表現の外にある。

アメリカ人はフランス人より日本の近くにいて、数年間破壊し合った悲痛な絆で結ばれていた。その上、アメリカ人は原爆を発明し、製造し、投下した事実に苛まれている。イギリス人の神経質な感性も同様に冒されていただろう。J.ハーシーの『ヒロシマ』は、被爆した生者たちが語らう原爆体験をつなげて細心綿密な物語に仕上げた最初の著作で、それが提供している本質的なものは、フランス人に欠けている「原爆による大異変についての感性的な表現」である。ヒロシマの人たちより、世界全体が地球を動転させ発明した人々をも呆然とさせた原爆投下による世界で最初の犠牲者になった。

（pp4-5,6-9）

ハーシーは、自分のルポルタージュを表現者たちの記憶に記録された多様な視像（Vue）の連続に留めるという表現方針を

とった。即ち、著者によって報告される表現者たちの記憶の内容が、動物的な体験の次元に留められている（激烈な外的・視覚的刺激が、内的に認識され意味付けられる暇がない）。トルーマン大統領は同じ大惨事を即座に歴史と政治の中に位置づけ、この投下によって世界にもたらされた新たな可能性を明示している。

『ヒロシマ』の第 1 章では、表現者のひとり谷本牧師の表現は、知性が錯誤に陥り感性的な側面しか持っていない。錯誤から見えて来るのは、もしも動物に記憶があればその記憶のようなものだろう。原爆投下とその直後の模様が次々に描かれ、この章全体がその事件の動物的な視像になり未来への展望を奪われている。第 2 章で谷本氏が幼児を背中におんぶしたまま叫んでいる女性を助けるために向かった救護所では、多くの負傷者が治療を待っていた。小高い丘の上からみると、ヒロシマ全域に色濃く恐ろしい毒気のような煙が幾重にも重なり立ち上って行く。どのようにして、これほど広域の破壊が静かな空からやってきたのだろうと自問する谷本氏は、少しずつ理性を取り戻し、この事件の人間的な意味を探し求め始める。原爆とは、人間の両手が未来の上にあえて意図的にぶら下げている可能性であり、ひとつの行動の手段なのだ。津波や火山の噴火が引き起こす恐怖には（付帯する）意味はない。何故ならば、津波や火山は、人に屈従を強いるために恐怖を引き起こしているわけではないからだ。一方、核分裂はひとつの「企て」であり、その目的は恐怖を引き起こす側の意思を相手に強制することにある。「企て」を不可能にする犠牲者たちの表現こそが、原爆投下を受ける側の人間的な意味なのだ。そうでないならば、原爆は煙にあぶられた白蟻の巣という動物的な意味しか持たなくなるだろう。被爆して死なずにその証言者になった人々は、自分たちにふりかかった不幸の理解可能な表現を保持する力を失っていた。ヒロシマのおぞましさは、そのような観念のための熟慮や思考が僅かしか働かない地点に達していたことにある。思慮には、そのための配慮が存続する必要があり、このおぞましさの中でも配慮を生み出す希望があって欲しいと願う。その再来を危惧する不幸を知的（概観的）に表現すると、感性的な表現がもたらす情緒的な要素が欠けてしまう。この要素がないと思慮は効果のないものになってしまい生き生きとした反応があとに続かなくなる。

我々が感傷癖を捨てつつ、感性的感動の可能性の極限へ向かうとき、我々の目の前に現れるのは動物的な苦悩の果てしない不条理なのである。原爆のような大異変は、それが生起する瞬間に限定され、その瞬間の後の帰結への配慮を超える。従って感性的な感動は、政治活動のような行動の出発点にはなり得ない。極限に向かう感性は政治から離れ、この感性にとって世界は不条理だけに閉じられる。政治の道に入って行く感性は、劣悪でごまかしに満ちている。政治の目的に仕えることで、もはや奴隷的な、少なくとも従属的な感性にしかなっていない。このように極限まで向かう「至高な感性」は、理性の限界から自由であり、明日への配慮からも自由である。

感性が「至高」であることにおいて重要な点をバタイユがあげている。

1. 何にも仕えず、従属しない自由で自立的な意識の状態

2. 富あるいはエネルギーの無益にも思える消費
3. 「将来の目的を目指す企て」、「明日への配慮」を振り払って、今現在を十全に生きる現在重視の姿勢
4. 理性を否定するというのではなく、理性の体制を超出する超理性的な姿勢
5. 個人的で利己的な快楽実現ではなく、他者あるいは外部の世界と深く交わっている共同的な関係性

（pp11-14,15-17,19-20,40）

原爆投下という未曽有の状況に対するバタイユの言及に依拠し、対人援助の問題を語る際には、過剰に還元的にならない慎重さが求められる。対人援助の現場を俯瞰してみると、援助職側の経験と英知が、常にクライエントの感性や知性に勝るとは限らないことが分る。我々は援助の方向性を失いパニックに陥ったり、課題に対して無関心を装い思考を停止したりすることを避けなければならない。アウト・リーチの重要性が指摘されている今だからこそ、クライエントとの精神的な距離やコミュニケーションのあり方に敏感になり、自分の援助が相手を屈服させようとする、M.フーコーが強調する「専門家暴力」になっていないか配慮する必要がある。

１１　石川学：『理性という狂気 G.バタイユから現代社会への倫理』

多くの科学者が「最先端の科学が統御し得ない怪物を生み出す前に、統御の仕組みを作ればよい」と指摘する。だが、成果を追求する理性の働きが、自らに歯止めをかけられるだろうか。現代は、理性的な活動が有益な結果をもたらすと無条件に信頼できる時代ではない。理性の狂気に対しては、狂気を事実として踏まえた対処の方針や倫理を構築する必要がある。G.バタイユは、「我々は、大衆が権力の意識を持つのに貢献しなければならない。権力は集団的昂揚からもたらされ、集団的昂揚は、理性ではなく大衆の情念に触れる言葉から到来しうる」と述べた。バタイユは、執筆活動の舞台とする雑誌『アセファル（acéphale 無頭人）』を 1936 年に創刊し、世界に対し「頭＝理性」として役目を果たすような「隷属」から自由になるために、自らの「頭＝さ迷える理性」から逃げ出し、同時に「頭＝指導者（当時、ファシズムが台頭し始めていた）」への従属から人間を解き放つよう呼びかけた。（p11,36-37）

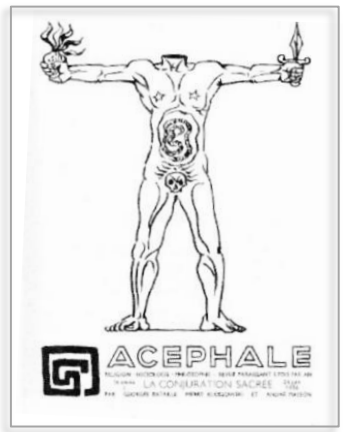

図７　雑誌『アセファル（acéphale 無頭人）』

国家の次元での「明日への心配り」は、理性の働きによるものであり、文明の進歩を支える「理性」こそが、国家間の戦争を引き起す原因になる。こうした認識の下で、バタイユは「至高な感性」をもつ人間に、戦争を放棄する可能性が託されていると考える。至高な感性の瞬間はある意味では動物的な純粋な感性に近い。動物的な感性は、「今ある不幸の代償として、未来に幸福が提供さ

れる」ことには関心を持たない。至高な感性は、理性の上位に位置付けられ、有効な活動の限界内では理性を認めるが、理性を超克し従属させる。こうした感性を持つ人間は、原爆の開発と使用を実現した現在においてこそ存在することが可能である。広島が、自分たち人間の理性がもたらした最大の悲惨であり、この悲惨がすでに到来している以上、今感じるままに振る舞うことに何の問題があるだろう。（pp59,62-65）

アメリカに次いで原爆を開発したソ連の経済は、余剰資産を生産手段の生産に捧げ最大の生産を目指して個人の意思を縮減・無化する。生産の余剰を国家の成長に費やそうとするソ連と、個人の自由を標榜し生産が爆発的総量に達したアメリカの経済的な拮抗が予測される。第二次大戦以前においては、理性から人間存在を解放しようとする実存変革の試みは、そのままの形で社会変革の試みに結び付いた。理性からの解放とは即ち、理性の支配下で虐げられている物質的に「低い」と見做されているものによる上下関係の価値逆転を意味し、同時に下層階級である労働者によるブルジョワジーの打倒という社会のヒエラルキー逆転へとつながった。バタイユの「アセファル」という「頭＝理性、指導者」を共に欠くイメージは、理性と指導者を打ち倒す欲求を呼び起こす試みであった。（pp73-76,79-80）

「悪や暴力」、「人類の破局」といった主題を取り扱うフランスの科学哲学者 J.P.デュピュイは、2004 年 12 月に発生したインドネシア・スマトラ島沖地震とそれに伴う大津波を、防波堤としての役割を果たすサンゴ礁やマングローブ林が人為的に破壊されたことや、タイ政府が観光業への配慮から必要な警告を怠っていたことに諸悪の根源があり、この甚大な自然災害は人災に他ならないとした。だがしかし、同時にデュピュイは破局的な出来事をなんでも人間の責任とみなす見方には、「近代史上の形而上学的おごり」とでもいうべき傲慢さが潜んでいると指摘している。なぜなら、大地震や大津波と言った人為を超えた事象を、正しく対処すれば解決可能な問題へ格下げしているからである。「科学が進歩すればうまく対処できるだろう、責任と能力のあるものがきちんと対応すればうまく対処できるだろう」といった考えを持つ限り、対処は先送りされ破局が到来する、それから「人災」と言いたてても後の祭りである。（pp90-92）

対人援助の現場には、「一筋縄ではいかない難問」があふれ返っている。「時間と経済の成果追求」こそが、最優先事項と条件付けられた援助者の「難しい状況、答えのない事態にしばらく耐え続ける力」（J.キーツ：ネガティブ・ケィパビリティ）を伴わない理性で、それらの難問を解決することは難しい。目の前の悲惨な出来事を直線的因果関係の結果と**画一的**に捉え、「当事者 A、あるいは担当した機関や援助者 B 個人の責任」とみなし、**その場限り、先送り**の反省や謝罪をしているだけでは、「解決策」どころか現実的な「妥協点」さえ単なる「未解決問題」に格下げされる。我々が今大会のテーマに掲げ、求めている援助のあり方とは真逆の援助である。理知的であろうとして感情の素直な表出を避け、「悲惨な、嫌な」などの悲観的感性や情緒を無視してはならない。

バタイユは「至高な感性」をもつ人間にこそ、戦争という選択肢を放棄する可能性が託されており、「至高な感性」は理性の上位に位置付けられ、

有効な活動の限界内では理性を認めるが、理性を超克し従属させると考えた。対人援助の現場で、教科書的な理論をジグソーパズルのピースのように当てはめて行けば、必然的にクライエントにとって望ましい結果がもたらされると考えるのは、クライエントの感性（情緒的要素）を無視した賢者を気取る驕りである。対象関係論を代表する小児科医で精神分析家の D.ウィニコットから「ちょうどよい母＝good-enough mother」というフレーズを借り、「ちょうどよい援助」のあり方について考えてみる。

後進やクライエントの成長を願い、あたたかい声をかけているだけでは、相手は援助者に幻滅し「成長」や「自立」が滞ることがある。前述の「難しい状況、答えの出ない事態に耐え続けられる」潮時を見極め、相手を見守りつつ、守る手を離すことも大切である。医療界では、2000 年前後を境に EBM(根拠に基づく医療)の重要性が強調され、業務に係る法整備がなされ、社会的弱者への配慮は深まり、クライエントが主体的に係るチームアプローチの重要性が強調されるようになった。だが、本来は利便性を高めるために導入された ICT（情報とコミュニケーションのツール）は、逆説的にクライエントとの接点を狭め、援助者の発言にはそれが依拠する evidence や fact の提示が必須になった。「インシデント・アクシデント報告」を例に挙げると、その原因究明や再発防止より、「反省や謝罪」が前提になり、「そこに至るまでの過程・事情」やその問題に携わったものの「情緒的な要素」は排除され、結果として援助行為自体が萎縮する傾向がみられる。家庭や施設内での「虐待」を容認する気は一切ないが、防犯カメラの映像や医療機関の受診記録に全てが反映されているわけではない。そのような問題は複雑で、時には「虐待と被虐待」の関係が逆転しかねない裏話が隠されていることさえある。バタイユが挙げた「至高な感性」の条件を自らに問いかけ、仲間たちに伝えるためには、日頃から理性と感性のバランスがとれた記録作成を心がけ、時間や手間をかけることを躊躇しない協働的対話のトレーニングを積み重ねることで、援助者もクライエントも社会と深く関わる力を身につけられるのではないか。これが「ちょうどよい援助」かなと、私は考える。

１２　大江健三郎：『ヒロシマ・ノート』

原爆を投下する広島の人たちの人間的な力を信頼して、そこに出現する地獄は快復不能ではないと考え、アメリカ政府は原爆投下を決断したのではないか。広島の人々は徹底的に壊滅され、その市街全体が一個の（ナチスの収容所の）ガス室と化すことで、原爆を投下した者たちに彼らがどのように恐怖に満ちた悪をなしたのかを骨身に徹して理解させるということはしなかった。原爆をある都市に投下するという決心を他の都市の人間たちが行うということはまさに異常だし、（事前に詳細なデータが無かったにしても）科学者たちに爆発後の地獄への想像力が欠けていたはずはあるまい。それでもその決定が成されたのは、この絶望的に破壊的な爆弾が炸裂しても、その巨大な悪にバランスをとるだけの人間的な善の努力により、この武器の悪魔的性格を人間が希望を見出しうる限界のこちら側まで緩和するであろうという「予定調和信仰風な打算」があったからである。

大江氏の、「予定調和信仰風な打算」すなわち、他の国や都市ならいざ知らず、日本のヒロシマなら地獄のような惨状から必ず復興するだろうという発想が、「トリニティ実験」まで行ったアメリカ政府側にあったとすれば、救いがたい図々しさで

ある。

広島の医師たちが、原爆という「二十世紀の最悪の洪水」後、すぐさま始めた活動は目覚ましく感動的だった。しかし 13 年後の 1958 年に、広島市医師会が被爆生存者である医師会員に対し回答を求めたアンケートの背後に孕んでいるものは、道徳的な責任の追及に係る凄まじい告発である。質問は以下の 4 項で、回答は『広島原爆医療史』に整理されている。

一. 貴下は原爆投下当時（昭和 20 年 8 月 6 日 8 時 15 分）どこにいられましたか。

兵役中　　疎開中　　在広島

二. 貴下は被爆当時、被爆者の救護に従われましたか。救護に従われた方はその場所と期間をお知らせください。

場所＝　　期間＝

三. 貴下は原爆による被害を受けられましたか（外傷、火傷、悪性症状など）

四. 貴下以外の医師にして救護に従事された方をお知らせください。

このアンケートは、広島市の医師会員に対して、被爆時に彼らが責任を果たしたかどうかを問い詰めているのだ。もし、被爆はしたが直接的な被害を受けず、救護活動をしなかった医師がいたとしたら彼あるいは彼女はこのアンケート用紙を鋭い刃のように受け取るほかはない。広島に、被爆で救護活動の意思を失った医師がいたとしても、それは人間的に異常な反応ではない。このアンケート以降、彼らは安眠できる夜を持つまい。

被爆当時、広島市内には 298 名の医師・歯科医師がいた。しかし彼らは「防空業務従事令書」によって市外への疎開を禁止されていた。歯科医師、薬剤師、看護婦、助産婦、保健婦も同様である。原爆によって 60 名の医師が即死、救護活動を始めることが出来た医師は 28 名、歯科医師 20 名、薬剤師 28 名、看護婦は 130 名であった。彼らが治療に当たった市内の負傷者の数は十数万人に上る。両手を骨折し半身にやけどを負いながら救護活動にあたった若い歯科医師は、過労で神経衰弱状態に陥り、年長の医師に「戦争が終わった後まで、なぜ広島の人間がこのように苦しまなければならないのか」と問い縊死を選んだ。それでもなお、自殺しなかった少数の傷ついた医師たちは全市をうずめる夥しい死者たちに囲まれ、ただ赤チンキと油（皮膚炎や軽いやけどに用いる酸化亜鉛を含むチンク油と思われる）で十数万人の負傷者たちに対処する勇気を持ち合わせていた。限界状況の全体の展望について明晰すぎる目を持つものには絶望しかないのだろう。限界状況を日常生活の一側面としてしか受け付けない鈍い目（あえてそのようにしか限界状況を見まいとする態度）の持ち主だけが、このような状況に絶望せずそれと戦うことが出来た。

（pp121-123,126-129）

「終戦間近、赤紙招集を受けた 45 歳迄の医師 50 人に、『貴様たちは国家存亡を賭けたこの一戦に、今日まで従軍志願を積極的になさなかったのは何事であるか。国賊にひとしい奴どもである。その意味を持って今回その筋の命令により、懲罰招集として一網打尽に動員を行った～中略～貴様たちの頭の中は馬糞同様で軍人精神は

蚤の糞ほどもない。今後は専ら軍人精神充実に重点を置いて鍛えるから左様心得ろ』と訓示を垂れた軍医中佐も 8 月 6 日朝、即死した」
（井伏　pp303-316）

広島市内の高校生たちを対象に原爆症の総合的な調査を行う上での最大のジレンマは、それが必要な調査でありながら、広島の高校生たちや被爆 2 世たちが不安や動揺に陥る可能性に由来している。それは、これから生き続けてゆく人々の原爆症の問題なのだ。ABCC に始めてやってきたのは優秀な遺伝学者たちで、原爆医療史の当初から次の世代の原爆症の問題は、世界中の医師の注目の的だった。広島市内の全てのハイ・ティーンたちを対象とする原爆症の調査が、不安のうちに孤立している若者たちを、ひとつの連帯の広場へ連れ出して開放するものであることを希望する。（pp152-153）

1958 年に不撓の医療従事者たちに対し行われた医師会のアンケート調査も、原爆投下を決定したアメリカ政府に匹敵する厚かましさで、「調査に関する説明と同意」など全く念頭に置かれていないのがよく分る。戦争とは縁のない今でも、医療者は常に内外から「檄」をとばされる。66 歳を迎えた私自身が、忙しさのピークを越えることができたのは、50 代の終りに、その筋から「労災申請」を提案された過重労働による心身の変調がきっかけだった。若い対人援助者に是非とも知っておいてもらいたいのは、「限界状況を日常生活の一側面としてしか受け付けない鈍い目」を持つのは最善の策ではない、家族や身近にいる人たちにとっては最悪の策にもなりかねないことである。また「アンケートや意識調査」について感じたことがある。多職種協働のトレーニングとして行われているグループワークの付箋張りやアンケート調査も、適切なタイミングで結果の集計とそれに対する講評がなされなければ、単なる主催者の自己満足と言われても仕方がない。同業者に対するものであっても、対人援助の臨床や研究で必須なのは、「相手に理解・納得が可能な説明を尽くし、自主的な賛同を貰う」水準の信頼関係である。大江氏が望んだように、アンケート調査がきっかけになり、広島や長崎の被爆 2 世・3 世が懸念する難病への不安から解き放たれ、ひとつの連帯の広場に誘われることを切に望む。

１３　三島由紀夫：『小説家の休暇』

ビキニ環礁の水爆実験「第五福竜丸事件」における補償問題で感じたことであるが、その実験を非人間的といい、反人道的というときに、我々の「人間なる概念」は、既に動揺をきたしている。政治的偏見なしに、水爆の実験をした国の人間が、被害国の人間に補償を提供する行為は、国際間の問題とか人種的偏見の問題を超えて知的な概観的な世界像に直面している人間が、自分の一部分である、そういう世界観と無縁な部分に慈悲を垂れていることを意味する。私は、それを人間相互の問題と言うよりも、人間一般の内部の出来事という風に理解する。我々が文明の利便として電気洗濯機を利用することと、水爆を設計する精神は無縁ではない。科学はそういう風に発達してきて、精神の歴史にも関わってきたのであり、火薬と活字の発明は、かつて手を携えて封建制を打破したのである。

現代（1955 年）の「人間概念」には、恐るべきアンバランスが生じており、広島の原爆被災者よりも、あの原爆を投下した人間に、こうしたアンバランスはもっと強烈

に意識された筈である。被災者には火と閃光と死を知的に理解する暇はなかった。原爆であろうと、大砲であろうと、小銃であろうと、被害者はいつも原始的な個体に還元され、死が彼を物質に還元してしまう。しかし原爆投下者はどうだったか。彼の肉体は小刀にも血を流し、うすい皮膚の下には、壊れやすい内臓が動いていた。しかも彼には距離があり、遙か高みから日本の地方都市を見下ろし、人間の同一の条件についての意識は隠蔽された。幾ばくかの技術と科学知識に恵まれていた投下者は、自分の感受性を、あの知的な世界像の下に押しつぶすことを知っていた。こうした小さな隠蔽と抑圧が、十分あの酸鼻な結果をもたらすに足りた。宗教及び政治における、唯一神狂的な命題を警戒せねばならない。現代の不可思議な特徴は、感受性よりもむしろ理性の方が人を狂信に導くことにある。

（pp83-85,143）

1954 年に起きた「第五福竜丸事件」において、アメリカ政府は被害者たちに賠償ではなく、「好意による見舞い」として200万ドルを支払い、日本政府はこれを容認した。新潟と熊本の水俣病でも、当初は加害企業から患者たちに、わずかな「隣人愛としての見舞金」が支払われている。三島氏は、原水爆の開発は「人間相互の問題」ではなく、「人間一般の内部の問題」と捉え、現代の不可思議な特徴は、感受性より理性の方が人を狂信に導く点にあると指摘した。私は三島氏が昭和 30 年に書いたこの日記を読み慄然とした。

加害・被害関係が明らかな「原水爆の実験や投下」とは異なるが、疾病や傷害に対する補償や援護を与える側の理性（どのような制度や基準の下、どの程度の障害に相当する）だけで判断せず、受ける側の情緒や感受性の問題にも目を向けるべきである。バイスティックの「社会的な問題の裏には情緒的要素がある」という言葉の真意は、援助者と被援助者という異なる立場の二者ではなく、人間一般の内部の問題なのかも知れない。

１４　上野千鶴子：『生き延びるための思想』

敗戦時、ドイツには加害者性としてのシンボル「アウシュヴィッツ」があり、日本には受難のシンボルとしての「ヒロシマ」があった。日本では、一億総懺悔の無責任体制を背後にした「犠牲者性」が構築され、「加害者性」は陰に押しやられた。天皇の戦争責任とA・B・C 級戦犯、庶民とりわけ（自らの意思や周囲からの圧力で銃をとった）男性の戦争責任と、参政権さえなかった女性の戦争責任が同じ理由はない。参政権、自分の運命を自分で決める権利がなかった女性に、そもそも戦争責任はない。戦争末期、新型爆弾が広島に投下されたことを、天皇はじめ軍部は十分に知っていた。しかしこの新型爆弾によっても天皇と大本営は終戦を決意せず、長崎への投下でもまだ決意していなかったそうだ。天皇及び大本営が無条件降伏を受け入れたのはソ連の参戦がきっかけであることは歴史的事実である。戦闘員・非戦闘員を合わせて沖縄地上戦が 20 万人、東京大空襲では 10 万人以上が被害に遭ったが、新型爆弾を大きな犠牲として強調することは、ほかの犠牲を軽視することにつながる。非戦闘員への攻撃は、当時でも国際法上の戦争犯罪だった。近代戦は総力戦で、総動員体制を伴う空爆や原爆投下は戦闘員・非戦闘員を選ばないが、非戦闘員も間接的に戦争に

協力しているので、攻撃を受ける理由があるという。

戦後 50 年以上経っても、日本における「広島」の象徴性と、アメリカにおける「ヒロシマ」の受け止め方の間には落差がある。「ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下によって戦争終結が早まり、地上戦を回避し、米軍の犠牲者を減らすことに貢献した」というトルーマンの決断は、後から原爆投下を正当化するために作られた「神話」であり事実ではない。原爆投下の正当化というレトリックは今でもアメリカで支配的で、あの戦争は「ファシズムに対抗する自由と民主主義を守るための正義の戦争であった」という考えである。そしてアメリカ側の認識を支持補強してきたのは戦後の日本政府だった。1994 年のハーグ国際法廷で残虐兵器を巡る審理が行われた際に、外務省の官僚は「原爆は残虐兵器とはいえない」と証言した。同じ場に広島市長と長崎市長が乗り込み、外務省と真っ向から対立する証言を行ったが、生物化学兵器や毒ガスが残虐兵器に指定されているにもかかわらず、「原爆は残虐兵器とは言えない」というのが日本政府の「公式見解」だった。（pp168-176）

「戦争を知る人がいなくなると戦争が始まる」とよく言われるが、幸い我が国がこれまで 80 年近く戦争と縁がなかったのは、広島の語り部の活動は勿論のこと、言葉少ない戦前・戦中派に染みついた「戦争の悲惨な現実」と「戦争に対する感性・情緒」の賜だったと考える。もみじの天ぷらを見て、季節感より戦時中の食糧難を思い出した高齢の医師がいる。我が国のかじ取りである総理大臣は、麻生太郎氏（昭和 15 年生）以降、鳩山由紀夫氏（昭和 22 年）、菅直人氏（昭和 21 年）、野田佳彦氏（昭和 32 年）、安倍晋三氏（昭和 29 年）、岸田文雄氏（昭和 32 年）など戦後派が多数を占めるようになった。戦勝国の代表者の理屈では、広島と長崎で戦闘員と非戦闘員の区別なく多くの人の命を奪った原爆は、「戦争の早期終結をもたらし、新たな戦争被害者を生まない、残虐ではない兵器」になる。ここにおいて、死亡者数という fact さえ「科学的証言」の論拠にはなり得ないことが分かる。戦争には加害と被害がつきものと言われる。だが、広島や長崎での原爆投下や東京大空襲、沖縄の地上戦に巻き込まれた非戦闘員たちも「正義の闘い」の加害者だったのだろうか。

「ケアの関係」は非対称的で、ケアするもの、ケアされるものと必ず強者と弱者関係がある。ケアするものはその関係から退出できるが、ケアされるものは（生きている間は）その関係から降りることはできない。そのようにニーズから降りることができない、問題から離れることのできない人を「当事者」だと言い換えることができる。だが、当事者研究を学問の場に持ち込もうとすると、学問の「中立性・客観性」という根拠がない神話をかざす抵抗勢力が現れる。当事者研究では、自分の経験を、安心できる聞き手のいるところで、悲鳴や叫びではなく筋道を立てて言葉にすることで、はじめて伝わる言葉・伝える言葉が生まれる。ケアは相手に対する介入だけによって成り立っているのではなく、相手の自発性や自立性への尊重と配慮によって成り立っている。「心にかける」と同時に手出しをしないで「見守る」、その両者が組み合わさって成立している。（pp347-359,pp387-388）

援助やケアの対象者が、自らの経験を、安心して語ることが出来る環境で言葉を紡ぐ。援助する側は、対象者の自発的で自立した行動を、心にかけるが手出しをせずに見守る。その関係性が、「ひとりで生き延びるための思想」であると上野氏は結んでいる。

繰り返しになるが、「0 時 0 分 0 秒」で時計の針が 1 本に重なるように、医療の分野では 2000 年を境に PC や電子カルテの普及、医業（医療ではない）コンサルタントの台頭、EBM に対する唯一神的狂信が新たな市場モデルをもたらし今に至る。医療と連携する対人援助の分野でも、「費用対効果」が優れた合理的な計画を最優先に取り込むべく「企業努力」に励むことを第一の目標に掲げる組織は少なくない。それらの組織が行う援助やケアは、クライエントたちが求めるそれとは大きくかけ離れたものになる可能性を孕む。トルストイの短編小説、「イワン・イリッチの死」では、死が近づき、家族や同僚に見放された主人公イワンの繰り言を下男のゲラーシムだけが聞き、むくんだ主人の脚を撫でさする。一体、誰が終末期の心身の苦痛や、慢性疾患に伴う人生への不安、社会への参加を閉ざされ抑うつ状態に陥った人の言葉に耳を傾けるのだろうか。「そこまで市場原理が大切ならば、教育や研修の段階から自他へのケアを放棄し、生物学的な知識と制度運用の機械的なスキルを身につけるのが早道だが、そうなると社会のネットワークは崩壊するだろう」と A.クラインマンは警鐘を鳴らす。「私たちは、まだその一歩を踏み出していない」と、私には明言できない。

１５　中村雄二郎：『臨床の知とは何か』

自然科学の有効な部分だけをみて、現実とのずれに目を向けない人がいる。近代科学が、自然を専ら人間のために役立たせる技術の対象にした結果、生態系や地球環境の破壊がもたらされた。生命の保全が最優先という前提に立てば、高度に自然科学化し、技術化した医療ほど「（人格を尊重した）人間らしい患者の扱い」から遠ざかる可能性がある。

「生きるということを人間の中心点として考えれば、そのまま「単に生き続ける」で差し支えないでしょう。然し美しいものや気高いものを一義において人間を評価すれば、その判断は間違ってくるかもしれません」（夏目漱石:『硝子戸の中』）

近代科学が見えなくしてしまった「現実」のひとつは「生命現象」そのもので、もうひとつは「対象との関係の相互性」である。例えば分子生物学が捉えているのは、分子レベルに還元された生命体の要素とその機械論的な組み合わせであり、生命現象、生命現象の意味、自律的な振る舞いや自己創造などは取り扱わない。「関係の相互性」についても、観測データは観測のための光や観測者の存在によって変化を被る。近代科学がこれほどまでに信頼され、説得力を持ったのは、「普遍性」「論理性」「客観性」という、自説を論証し相手を納得させるのに好都合な性質を有するからに他ならない。このような原理を備えた、機械論的で力学的に選択され、整えられた理論によって「現実」は捉えられるのだろうか。

近代科学は何を軽視し無視しているのか。

1. 「普遍性」は有機的なまとまりを持った宇宙、他にない固有の場所としてのコスモス、生命体が個体や集合として生きる様々な固有の場所「コスモロジー」（固有な世界）という原理を重視しない。

2. 「論理性」は単線的因果関係を説くのには適しているが、自然現象では単線的因果関係は限られた場合しか成立しない。「現実」はいろいろな側面を備えており、環境との相互関係が複雑な、生命体や人間的事象ではその傾向が強まる。サイン（記号）は一義的であるのに対しシンボル(象徴)は多義的なので、「論理性」が排除したのは、事物の多義性「シンボリズム」(象徴表現)である。
3. 「客観性」は、主観と客観、主体と客体（対象）の分離・断絶を前提とする。客観や対象は、主観や主体の働きを受け被る受動的なものである。人間の営みとしては、ある場所や時間の中で、自分の身体を他人の視線にさらして行う「パフォーマンス」(身体性のある行為)を通した対象との交流の中で事象を捉える。
(pp4-11)

知としての「機械論」が成功を納めたのは、事象の自然で必然的な因果関係を環境との複雑な相互関係の網の中から取り出したからで、このような捨象や抽象が、我々の実際の行動に役だつからである。そのような近代科学の「機械論」的方法が、結果として人間が実際的な行為をとるときのものの見方と一致し、次第に近代社会での人間の「常識（コモン・センス)」を形作った。近代科学から、人々が自己を解放できない別の理由は、制度化された科学の外部へ出ることを恐れる研究者たちの関心が既成の方法の推進と部分的改良へ向くからである。(pp14-23)

フッサールは、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の中で、「学問の危機は何よりも学問が『生』への意義を失い、単なる『事実についての学』に還元する実証主義的な傾向のうちに見られる。近代人の世界観は専ら実証科学によって規定され、また実証科学がもたらす繁栄によって幻惑された。それを徹底することは、真の人間性にとって決定的な意味を持つ問題（生）から目をそらすことを意味する」と述べている。物理学的な客観主義の出発点は、数学が物質の世界をその空間的・時間的な形態を理念化し、理念的な客観性を創造したガリレイの「自然の数学化」である。数学は経験的・直感的な多様な形態を含む空間と時間という生活世界の、漠然とした一般的形式から客観的な世界を作り出した。また測定術と結びついて、事物の空間的認識という帰納的な予見をした。

フッサールは、近代科学をガリレイに代表させ以下のように性格づけた。

1. 自然の数学化が、物質世界の理念的客観化と測定術を結びつけ帰納的予見を可能にした。
2. 直接には数学化し得ない感性的性質にも、数学的対応物を想定し因果性系列の地に存在するという仮説を立てることにより取り組んだ。
3. 数学の技術化とそれに基づく事物の「意味の空洞化」は、数学の自己適用による。
4. ガリレイは、数学的に理念化された自然の発見者であると同時に、生活世界の隠蔽者となった。
5. ガリレイは、あらゆる精神的なものを捨象することで物質的な

事物だけが残り、完結した物質界としての一義的な自然が得られるとした。

デカルトが数学的合理主義の考え方によって哲学を＜普通数学＞として構想し、新しい合理主義と二元論の基礎付けを目指しながら、その合理主義を根底から突き崩す思想、超越論的な主観主義による懐疑「デカルト的判断停止」を想定したことから、フッサール自身は「超越論的現象学」を打ち立てた。そこにおいて、客観的科学が見ようとしなかった「生活世界」、「偏見（ドクサ）」として蔑視されることが多かった領域を、フッサールは以下のように捉えようとし、価値転換を行った。

1. 客観的・論理的なものではないが究極的な基礎付けをなすもの
2. 主観的なものの固有な存在様式をなすもの
3. 根源的明証性の領域
4. 科学の世界を基礎づけ、その独自な普遍性において科学を包括するもの
5. われわれの実践と密接に結びつき、その基盤および地平をなすもの

ポランニーは、化学者としての経験に基づいて近代科学の普遍性・論理性・客観性という神話を打ち砕き、科学の対象からの切断を退けるため「暗黙知」を自然科学研究のうちで見出した。それは、以下のような特徴を持つ。

1. 我々は自分たちが言明できることよりも多くのことを知り得る。
2. このような知識は、我々の個人的な裏付けを持っている。
3. 我々の認識の枠組みの実在性と性格は、焦点的にも捉えられず、我々の行動のうちにただ順次的に表れる。

例えばピアノの習得や医学的診断において、個別的な知識の習得は無論必要であるが、それだけでは有効に演奏や診療は行えない。それらの個別的な知識はひとつの全体として統合され、「諸要因の細目」「統合化された全体」「それらを結びつける個人」によって初めて理解できる。人が諸要因から全体へと注意を向け、その両者を結びつけるように働き、諸要因を知るのが「副次的意識」で、全体を知るのが「焦点的意識」である。今日の「生命現象」の重視を、「生命の偶像支配」と指摘した I.イリッチは、「生命あるいは命は、もともとは福音書中にあるキリスト教的概念で、今日エコロジーなどで言われる個々の命や人間生命は、19 世紀初頭にラマルクが提唱した生物学・進化論とともに現れたものである。そこに現れた実体的な生命という概念は、人格的な個人という正当な概念を無効にする恐れがある」としている。いたずらに生物学的レベルで生命を実体化すると、単なる所有権の対象としての財産のようなものになり、経済的な行為や管理の対象となる恐れがある。アメリカの「生命倫理」の議論に見られるように、実用主義や功利主義的な傾向が強い、世俗化による人的資源への堕落が問題になる。(pp28-36,37-44)

ハイデガーは、「技術は単に応用自然科学にとどまらず、生態系の一部そのものとの相互作用のうちで成り立つものとして捉えられるべきものだ」と指摘する。技

術は、科学が明らかにした自然の潜在的な力を道具やその延長にある機械を媒介にして、開発、変形、貯蔵、分配する働きを持っている。

科学と機械という生命原理から遠く隔たった構築物に媒介されていると、それらを含む技術を「生命的世界＝生活世界」にフィードバックさせることが難しくなり、その事実に思い至ることさえ困難になる。これらの技術的所産の反生命的な帰結は、かつては核爆弾、細菌兵器、化学兵器などの兵器について、今日では遺伝子操作やフロンガスや酸性雨などのもっと広い範囲の技術的な所産にもいわれるようになった。技術が何か特別なものと考えられていたのは、「生態系＝生活世界」という拘束条件が無視され、制作活動とその目的が乖離していると見做されていたからである。(pp75-76)

ニーチェによれば、演劇の本来の特質は、人間と世界を凝縮して重層的に捉え描き出すこと、等身大の日常的な人間ではなく、可能的な人間を表現することによって、人間の隠れた本質を描き出すことにある。ここにおいて大きな意味を持つのは対話ではなく、「コロス（舞唱）」である。コロスは何よりも民衆の無意識を現わし宗教的である。ディオニソスの祭りでのサテュロス（豊穣と欲情の化身）のコロスがその典型で、人間の最も気高くて強い情動の表現であり、人々を世俗的な国家や社会の生活から宇宙的な自然に引き戻す力がある。（pp115-117）

「普遍性」「論理性」「客観性」という機械論が持つ特性は、どのひとつをとってみても科学の知にとって強力な論拠になるが、これら三つは密接に結びついて働くことで論拠として一層強力になる。たとえば、客観主義によってとらえられたあるメカニズムは、普遍主義によって一層その自立性が高められるとともに適用範囲が広まり、さらに論理主義が結び付くことによって、説得力を増すだけでなく、技術的再現が可能になる。しかし現実や自然から人間は手厳しいしっぺがえしをされるようになった。（pp130-131）

「説明と同意」という問題の基礎となるのは、人間同士の思いやりであり、人格的な主体同士の関係である。この関係は、同等な権利主体同士の単なる法的な関係を超えている。人格的な主体同士の関係であることによって、そこに誠実さと信頼があることになる。つまり医療行為を巡る人と人に、契約関係であるよりはむしろ協力してより良き医療行為を行うための人と人とのパートナーとしての関係である。十分な説明を受けてする自由な同意には、単なる法的な権利・義務関係を超えた、そのような関係を具体的に表現し確認するものでなければならない。(pp202-203)

「科学と現実」に関する問題の総括を試みる。近代科学が軽視した「現実」は、「生命現象」そのものと「対象との関係の相互性」であり、近代科学の「普遍性」「論理性」「客観性」は、それぞれ「固有の世界」「事物の多様性」「身体性のある行為」を併せ持つ人間の「生活世界」を排除してしまった。そして「トリニティ実験」から広島と長崎への原爆投下、さらに「黒い雨訴訟」に至る近代史の中には、「都合の悪い部分を隠した普遍性」や、「柔軟に修正ができな

い論理性」、「ある立場の人にしか理解・承服できない客観性」をみることができる。

現実や現場（臨床）より「高尚なもの」と誤解されている学問や思想の「立ち遅れ」は、個人の尊厳や地域社会崩壊の危機をもたらし、次の世代が無条件に満喫して然るべき生活環境の破壊をもたらしている。この課題を解決するために必須なのは、過去や未来を含む自他への思いやりであり、人格を有する主体としての対象との関係の相互性である。援助行為を巡る人間同士の間には、定式化された契約関係より、一貫しているが、状況によっては主客が交代することも可能な合意に基づくパートナー・シップが求められる。

１６　牧野雅彦：精読アレント『人間の条件』

「思考」は芸術作品の源泉だが、偉大な哲学には思考が変形も変容もされずにそのまま表現されている。それに対し、我々が知識を獲得したり貯蔵したりする「認識」の主要な表現が科学と考えることができる。認識は、ある仮説を検証できればひとまず終わりを迎える。思考は、終りもなければ、外から与えられた目的もなく、具体的な成果や答えをもたらすことは無い。だが思考もその結果を人から人へと渡していくためには、「事物」とそれを加工する「制作」が必要になる。こうした永続のための手がかりを残すこと、そこに人間の諸活動における制作の役割がある。最も優れた「工作人」である芸術家、詩人、歴史編纂者、記念碑建設者、作家がいなければ、それを目撃した者たちの驚愕や感慨を伝えることはできない。人々が行為し、語る物語だけでは、残り続けることはできないからである。芸術作品は、そこに込められた思考や「意味」によって永続するのであって、作品の持つ「有用性」や「効用」によってではない。

（pp180-181,184-185）

「行為」の予測不能性は、始まりも目的とする終りもなく、行為の結果としての「物語」そのものから生じる。行為している今という瞬間が流れ去り、過去になってはじめて物語は成立する。行為の結果もたらされる物語の性格や内容がどのようなものであれ、その行為の意味が完全に明らかになるのは、それが終わり、行為の舞台から退いてはじめて分るものである。プラトンは「行為者は自らの行為の結果を制御できない」という「行為」の特質に疑念を持ち、出来事の舞台の背後に潜む物語の作者を想定した。これは、歴史が人間の行為が織りなす出来事の連鎖であるにも関わらず、人間はその作者ではないという難問を解こうとする試みである。キリスト教の「摂理」、アダム・スミスの「神の見えざる手」、ヘーゲルの「世界精神」もその延長線上にある。行為のこうした性格のために、人間関係は特有の脆弱性を持つ。人間関係の網の目の中で行われる行為は、ひとつひとつの行為が、さらに新たな「行為（action）」となって影響を拡げて行き、閉じられた円環の内に留まることはできない。プラトンは、過程としての性格を持つ「行為」に代えて、確固として持続するものを作り出す「制作」によってこれに対処しようとした。（pp190-181）

認識を通じて知識を獲得し蓄積していくのが科学であるが、認識は仮説が検証されればその過程を終える。思考と行為の結果としての「語り」は、それとは反対に終りもなければ、外から与えられた目的もなく、具体的な成果や答えをもたらさ

ない。思考もその産物を永続させ、人から人へと渡していくためには、事物とそれを加工する制作が必要である。行為の予測不能性は物語そのものから発生する。この行為の特性から、人間関係のネットワークの中で行われることは、理論化や説明が可能な、明瞭で力強い印象を与える科学とは相容れず、例えば語り部の活動が確かな現実や経験に基づくものであっても、「曖昧で主観的な」と表現されることが少なくない。これが「主観的で曖昧ではない」ことを認めたのが「黒い雨訴訟」の高裁判決であった。自らを省みれば明かであるが、「語り」は環境や相手によっては、良識的な範囲の妥協を必要とすることも忘れてはならない。

１７　東畑開人：『普通の相談』

これまで、「学派的心理療法」で前提とされてきたのは、文脈を失い、真空の宇宙に浮かんだ「理念的面接室」である。S.フロイトの診察室が、20 世紀初頭ウィーンのブルジュワ文化を文脈としていたように、全ての面接室はローカルな社会的環境に取り巻かれている。「〇〇療法入門」書などにもっとも欠けているのは、それぞれの心理療法が如何なる地域の、如何なる施設で、如何なるクライエントに対して提供された、あるいはされているものであるかという社会的条件である。ローカリティを廃した理念的面接室を前提とすることで、「学派的心理療法論」は普遍的なメソッドとして自己を提示し、心理学的な宇宙に議論を絞る。

(pp38-40)

(普通の相談では)臨床家が理解したことをきちんと説明するが、いわゆる解釈的な介入ではなく、説明は心理教育に近い。クライエントの心だけではなく、置かれている環境や周囲の人についても具体的な説明を行う。それがクライエントの抱えている苦悩のメカニズムを明確にし、自己理解を促し、今後の見通しや、今必要なことについてのアドバイスを可能にする。重要なのは知的な説明であり、知識の提供であり、言葉をインストールし熟達することである。心理臨床家は感情や情動を重視する傾向にあるが、心がすぐには納得（受容）できないことでも、頭で理解しておくことには価値がある。それは、ままならない自己を認識することにもつながるし、言語的に問題が共有されたことそのものが治療関係を強固にしてくれる。普段の人間関係でなされるアドバイスには、ほぼ必ず自己開示が含まれており、経験談、臨床経験、人生経験はアドバイスを効果的に伝えるレトリックになり得る。精神分析的心理療法では、そのような発言は「自己開示」として慎重に取り扱われているが、それなりの理由があり、「過剰にならず、局所的に」を心がける。大切なのは説明とアドバイスがセットになっていることで、アドバイス無き説明は、現在だけが与えられて未来が欠如しているから「放置」になるし、説明なきアドバイスは納得感が伴わないので無効である。平凡で誰でも思い付きそうなアドバイスが思ってもみなかったと受け止められ、生活の改善につながることがある。（pp54-55,56-58）

カントによれば、「世間知」とは「学校知」と対置した知のありようで、学校を出た後に世間を生きて行く上で学ばれる人間と社会についての知である。学校で「専門知」を勉強すると同時に、人生に挑み、生活を営んで行く中で、人間とは如何なる存在であるのか、社会とはどのような場所であるのかを少しずつ知って行く。どのようにすると

生きやすく、どのようにすると生きづらくなるのかを学ぶ、一般的には「常識」とか「良識」と呼ばれるような知の総体が「世間知」である。職場の同僚を怒らせてしまった時、「ちゃんと謝って、しばらく距離を置けばもとの関係に戻れるだろう」という判断は、その同僚を熟知し、これまでの経験の集積から得られた対人関係についての世間知から回答が導き出される。「世間知」には「人間とは如何なる存在か(フォークサイコロジー)」と、「社会とはどのような場所か(フォークソシオロジー)」という構成要素がある。フォークサイコロジーの重要な機能は、自分や他者の逸脱的な行動を、「あれは～だったから」と物語化することである。その物語を理解したら適切な介入を行うことが大切だ。フォークソシオロジーは、私たちの身の回りにある具体的でローカルな環境について、「～ならこう立振る舞うのが良い」というアドバイスになる、「先輩の知」である。先輩はそれぞれのローカルな環境に慣れ親しんでいる人のことで、その知を、身を以て蓄積している。その場所には如何なる社会的力動が働いているのか、それは私たちをいかに傷つけ、支えるのか。そこにはどのように適応して、適応できないのかなど。

体系的な理論であり、ユニバーサルに適用可能な知として精錬された「学派知」に対して、「現場知」は断片的でローカルな知の集積である。それぞれの臨床現場や職種には固有の作法や習慣があり、ひとまとまりになって小さな治療文化を形成する。「学派知」だけでは現場で働くことはできない。「現場知」を学ぶことで、同じ職場で働く人たちとの共通言語を使えるようになり、組織の一員として支援を担当することができるようになる。連携を可能にするのもこの「現場知」で、訓練期間中でも「学派知」が過度に重視されると弊害がある。「現場知」にはハードな面とソフトな面がある。ハードな面はその現場を巡る法律や制度、経営など社会制度と連動するので異なる職場でも同業では共通する点が少なくない。ソフトな現場知はよりローカルで心理的、経験的なもので人間的なものである。そのような現場知が活用されてトラブルが穏健に処理されて行く。それがどのように修復され、如何なる場合には後遺症を残すのかが分ってくる。これがインストールされると後輩の指導ができるようになってくる。

(pp98-102,121-125)

前項の中村の議論からも分かるように、確かに対人援助の臨床や研究に「科学性」を求めると、社会的条件・ローカリティを排した理念的面接室の中で援助を行うことも起こりうる。クライエントを取り巻く現実を考慮に入れず、普遍的であろうと意図しすぎた援助は有効ではない。すぐに腑に落ちる状況には至らなくとも、援助者とクライエントが、解決に必要な方策をその段階で可能な範囲、互いに理解し合おうとするのは良いことである。暴力的にならないよう配慮し、クライエント自身が「見て見ない振り」や、意図せず誤解したりしている心理状況、置かれている環境や周囲との関係性についても説明的に言及する必要がある。独善的な学派的思考や本質を違えた知識に還元して途方に暮れるくらいなら、少々垢抜けなくとも、日々の決まり事や手順の中で、クライエントと手を携えて解決の道を模索するのも悪くないような気がする。

【あとがき】

広島大会のテーマに、「対人援助の多様性と持続可能性」が掲げられたのは、岡崎正明・迫共両大会長はじめ実行委員の多くが「画一的で、その場限りの対人援助」に、少なからず問題意識を持たれていたからなのではないか。昨今は、対人援助職も例外なく所属組織や行政に対し定期的な「成果報告」を求められ、「根拠に基づいた援助を行ったか」「それは科学的な援助であったか」、さらに「援助は遅滞なく行われていたか」と問われる。現場スタッフやクライエントに対し、意識調査や満足度調査を行っている組織もあるが、実はそれも、「業務の質向上」と同時に「経済と時間の目標を効率的に達成させる」ことの意識化が目的であったりする。

前号・今号では、広島と長崎への原爆投下から、最近の「黒い雨訴訟」結審に至るまでの歴史を学び、「科学」にも不確実性や非合理性があり得ることを再確認した。さらに、フッサールらの言葉を通じ、中村が指摘したように、「科学」が科学であるために捨象してきた「生活世界」が、対人援助の分野ではクライエントのみならず、援助者自身にとっていかに大切なものか痛感した。そのことを伝え続けるひとつの方法として、バタイユの「至高な感性」に基づく「語り」という行為がある。①「その時、雨はどこにどれくらいの時間と量、降ったか」を調べることも大事だが、②「誰が、いつ、どのような雨にどれくらい逢って、そのことでどう感じたか」が分かる語りも大切である。「一瞬にしてバケツをひっくり返したような雨に遭い、8月なのに身も凍る思いをした」という語りは、①においては不要な情報かも知れないが、②では語りの信憑性を高める。

多様で持続可能な対人援助には、裏付けになる科学性は勿論のこと、その科学性を基礎付け、包摂する、実際の経験や感性に基づく「語りを語る上での良識」が求められる。そして対人援助の効率も軽視できないが、その場合、功利主義者ジェレミー・ベンサムが述べたように、「全ての個人が一人として数えられ、如何なる個人も一人以上と数えない」ことが大前提になる。

【参考文献 2】

１０．G.バタイユ著　酒井健訳：ヒロシマの人々の物語.景文館書店.2020.

１１．大江健三郎：ヒロシマ・ノート.岩波新書.2023.

１２．石川学:理性という狂気　G.バタイユから現代社会への倫理.慶應義塾大学教育研究センター選書.2020.

１３．三島由紀夫：小説家の休暇.新潮文庫.2020.

１４．上野千鶴子：生き延びるための思想.岩波書店.2013.

１５．中村雄二郎：臨床の知とは何か.岩波新書.2015

１６．牧野雅彦：精読アレント『人間の条件』.講談社選書メチエ.2023.

１７．東畑開人：ふつうの相談.金剛出版.2023.

【引用文献 2】

４．M.フーコー著 箱田徹訳：ミシェル・フーコー 権力の言いなりにならない生き方.講談

社現代新書.2022.
5．M.L.リトル：ウィニコットとの精神分析の記録.岩崎学術出版社.2010.
6．E.フッサール著 細谷恒夫・木田元訳：ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学.中公文庫.2011.
7．M.ポランニー著 髙橋勇夫訳：暗黙知の次元.ちくま学芸文書.2015
8．M.ゲルヴェン著 長谷川生涯訳:ハイデッガー『存在と時間』註解.ちくま学芸文庫.2015.
9．A.クラインマン/江口重幸/皆藤章著 皆藤章編・監訳：ケアをすることの意味.誠心書房.2017.
10. K.L.ラジク/P.シンガー著 森村進/森村たまき訳：功利主義とは何か.岩波書店.2018.